

シユキヤ緑の旅(三)

視察の旅人

最後に氏は「單に農産物に斗りする即ち農工商を兼營して最も有利な方法で事業を經營する」と云ふ考へを抱き、そして又た之を研究して實行する事が成功の第一要素だ、尙ほ私の希望を云ふなら當総の日本人が今後活動を聞いて世界の大勢に着目して、自からなさんとする一定の不動の事業を定め一系亂れず此の國に殖民し來つた目的に向つて進み、後繼者の發展のため堅質な基礎を築き上げん事を切望してやまない次第である」と云つてゐる。

旅人は此の氏の熱烈な同胞のためなしつゝある、かくれた仕事に對して涙ぐましい感謝せしむる事、赤嶺新野榮氏や發展史の著者が邦人發展のため盡力される赤誠は他綱の元老連と變る所がないと思つた、それで共に會報に明治大帝の御製には居られない、赤嶺新野榮氏や發展史の著者が邦人發展のため盡力される赤誠は他綱の元老連と變る所がないと思つた、それと載つて居つた、御製の教訓は正に我々海外殖民が心得ねばならぬ事と思つた。

旅人が殖民地を視察に來て此の發展史を讀み先輩諸君が既に山高模な景、米や珊瑚を山頂に見似た山水に面して埋める事は本懐だと思つた、ブラジルに來て未だ見た事のない清流のほさり道端の小流に面した沖縄縣人の舌鼓を打ち乍ら

沖「ドウデス、ソロカバナの方は」
旅人「棉は根切虫にやられました」
沖「當地も去年は穀が四十
ミルでしたから餘程よかつたが今年は安くつて」

旅人「今年は何程度ですか」

沖「四十五キロ一俵です」

旅人「二十五ミルなら喜んです」

沖「マソンナラあきらめても出せます」

旅人「豚は今アローバ何程度で賣れます」

沖「アローバ五十三ミルです」

沖「借地ですから本年から土地を買つたら三四千本植える筈です」

旅人「那裡殖民地は此處から何キロ位あります」

沖「三キロ半斗りで沖縄縣のものが五家庭斗り居る此の先の今道路仕事をして居る所から這入るのです」

旅人「氣候や病氣はどうですか」

沖「此のキレイナ水の所に病氣があつてたまるが病氣ですか、二年半居るが病氣年一アルケル何んばうですか」

旅人「そうですが借地料は一年一アルケルですか」

沖「私等百二十ミル一アルケルに拂つてます」

旅人「こんな事を話し乍ら約一時間ばかりの事を話しました」

沖「この種類の雜交を練返して居る中には定まつた標準は無く從て羽毛、足其他の型は一定して居ない唯頭に小さな毛冠ありて鶴冠は淡紅色で三重になり居れど此鶴の肉は美味でなく卵も小さいとして八乃至十二個產めば直ちに巣につき又三十日位で産み初め年に五乃至六回繰返す、そして母鶴の肉色をして居り足に毛を有し淡紅色で少し黒味を帶びて居る弱く殊にアレーラ(赤痢)等の毛は白色及黒に青色がつたものも出来ない場合にでも使用出来ない、尚病氣には

旅人「この種類の鶴の肉は

沖「この種類の鶴の肉は

旅人「この種類の鶴の肉は

</

